



能古博物館だより



青年座女優不二子像・50号 多々羅義雄(1894~1968)

特別企画展

能古出身の画家『多々羅義雄作品展』

理事長兼館長 原 寛

洋画家多々羅義雄の本館所蔵作品を展示する特別企画展です。館だより創刊号(平成元年9月発行)を飾った谷口治達氏(現・田川市美術館長)の寄稿の一部を掲載し、本展の紹介といたします。

能古島生まれの洋画家多々羅義雄について福岡市では意外に知る人が少ない。一つには地道な画業であったため、また一つにはずっと東京に住み、その上、画家としての盛期が戦中戦後の混乱期と重なって、郷土福岡で盛大に画業を披露する機会が乏しかったためだろうと思う。

昭和四十三年(1968)十二月、多々羅は七十四歳で亡くなった。その九年後、折から建設準備中の福岡市美術館がプレ・ミュージアム事業として、生涯の作品から六十余点を選び、渡辺通りの秀巧社ホールで遺作展を開催したが、それが多々羅の郷土におけるほとんど唯一の大規模な展観となった。

私は最晩年の多々羅に一度会ったことがある。昭和四十一年秋、旧福岡スポーツセンター前にあった



原 寛

新天町画廊の主人 豊原が案内して西日本新聞社を訪問された。私は当時、

同社文化部に勤務し駆け出しの美術記者でその応対に出た。

「これから八女の坂本繁二郎先生に目にかかりに行く」という話であった。多々羅は既に太平洋美術会を退き、昭和二十七年に自ら組織した光陽会の会長であり、豊原はその会員だった。

多々羅の作品を見ると細部にこだわらぬ大らかな構図が印象的で、能古島の汚れを知らぬ清らかさやのどかさが連想させられる。

人物も風景も、苦渋や激情を感じさせぬ抑制した描法で、その点、穏和で地味な抑制した画風を思わせるのだが、ふとその色彩にひきつけられる。

緑、赤が愛用され、時に大きな色面をなし、濃く深い色調になっても濁ることなく、ピロイドのようなあたたくく鮮やかなきらめきを持っている。黄色を含めそれらの原色が支えあって画面を豊かに満たしている。

その色彩の深みの底に、少年の日青木繁に点火された妖しい芸術の業火が燃えているように思う。

★特別企画展『多々羅義雄作品展』開催中
★12月16日(日)まで。

『多々羅義雄作品展』の紹介

開館以来の大型展示

本館所蔵の油彩約100点、デッサン約50点、デッサン帳約30冊の作品群の中から、50号から4号までの油彩26点(海、島、肖像、裸婦、自画像、母像など)のほかデッサン4点を選んで展示。多々羅が学んだ東京の太平洋美術研究所の先輩坂本繁二郎像(4号)もある。

関連資料も豊富に展示した。母たま(慶応2年生まれ・昭和3年3月11日没)が次男の義雄へ書き送った毛筆の手紙(大正2年(1913)1月2日付け)は、3年前に上京した義雄に新年のあいさつを述べ、毎月の学資16円の送金を伝える内容。親心を切々と訴えて読ませる。

「金子(きんす)十六円今日送り候 比年(今年)もせいでしてんきようなされ度(たく)いのり上(あげ)候……」

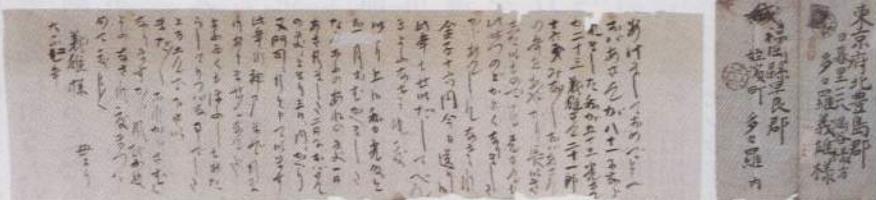


21歳の頃、日暮里のアトリエにて



母・たま像

たまは、外国航路の事務長だった夫と早く死別。女手一つで男子3人を育てた。後に送金は18円に増額されるが、明治43年(1910)末から大正7年(1918)までの約8年間、毎月送金した。 義雄のアトリエの雰囲気を伝えるイーゼルや椅子、大型の道具箱(裏に大正2年5月16日と墨書き)は2階の出窓付近に展示した。 1、2階のケース内に並べた愛用のパレット、絵具箱、スケッチ帳、絵筆、ペン、ハサミ、ちびた鉛筆などは、没後44年を経てなお、多々羅画伯の息遣いを伝えるようだ。 展示品はすべてご遺族の寄贈か寄託によるもので、別館の1、2階を全て使った大がかりな展示は、平成元年(1989)の開館以来、初めての試みである。



母たまの手紙(巻き紙・縦17.5センチ、横65センチ)



工場風景・ボイラー



坂本繁二郎像



富士山

能古博物館所蔵「石橋家文書」から その7

家屋敷売買・賃入れ証文(続)

(参照資料・石橋家文書20-1、20-2、30、31)

友の会会員 石橋善弘

地域史研究とは、とどのつまり、「だれが」、「いつ」、「どこで」、「何をしたか」、その結果「どのような」地域社会が形成されていたかを明らかにしていくものだと思いますが、このうち、「だれ」については、藩士・武士階級の場合は公の記録も多く残っているが、庶民の場合はそうはいかない。ところが、「能古だより」第66号で紹介した土地売買証文・賃入れ証文だけで、10名近い庶民が登場する。

このことからわかるように、石橋家文書は庶民の「だれが」、「いつ」、「どこで」、「何をしたか」などのほか、それぞれの時代の世相や物価など、地域社会のありようにまつわる問題に光を当ててくれるものとして価値があるだろう。また、福岡藩怡土・志摩・早良郡役所管轄内では、青木家文書、浜家文書などが残っていて、それぞれに解説作業が進んでいるようだから、石橋家文書とつぎあわせることにより、姪浜(現福岡市西区)に限らず旧糸島郡(一部は現福岡市西区)を含めた地域の様子がわかってくるだろう。

さて、本稿では、前回に引き続き家屋敷などの売買を扱うが、今回は少々クセのある売買を紹介しよう。

ややこしい家屋敷の売買

文書番号20-1の文書は、天保14年(1843)卯12月に安美屋九右衛門、平三が家屋敷を石橋善三郎(房種)、善五郎(後の石橋善左衛門房重)親子に

売ったときの証文であるが、標記は

「私抱横町家屋敷永代相伝売渡申証文之事」

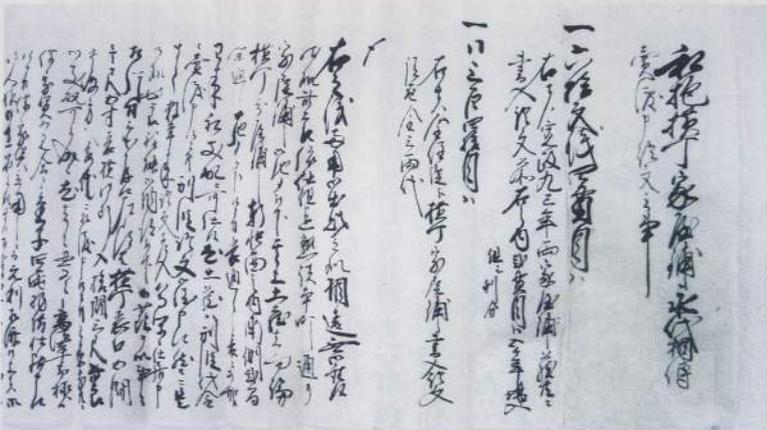
となっていて、売渡の理由は書かれていない。この点は前号(能古だより「66号」)で紹介した賃入れ証文、売渡証文とは異なる。標記の次に書かれているのは、売渡金額であるが、

二、六拾文銭四貫目

右は寛政九巳年両家屋敷蔵と共に書入証文前右之内式貫目ハ五ヶ年払入、

二、同二百四拾目

右は金住屋江横町家屋敷書入証文請返金二両代」となっている(写真1)。



(写真1)

前段には、寛政9年(1797)という、この売りの約45年前の話が持ち出されていて、

何となくいわくありげである。上、後段をみると、此の家屋敷はすでに金住屋(石橋姓)からの借金の担保になっていて、その借金を返して証文を取り戻さないと売れない屋敷らしく、ややこしい売買になりそうな雰囲気がある。実際、本文は、

「右之儀当用御出財之処相違無御座候 然此節依仕組遂熟談本町通り家屋舗御緩め被下其上土蔵ハ勿論横町分屋舗軒帳面之内南側式間余通り御弛め被下候付表通り之裏に相加江已来私支配二可仕候 尤土蔵ハ別段代金ニ売渡申候二付別段証文御渡申候 然ルニ是まで数年来証文差入等閑(なおよざり)に仕居申候此節程能(ほどよく)御納得被下御陰を以事々相片付け辱候 左候ハバ横町表五間壹尺五寸裏横同断入拾間三尺此節貴殿方へ永代に相渡申候二付已来家共に御支配可成る候 尤去る丑冬より高須吉十郎様より借家賃為見合ハ金子四両拜借仕居申候に付借家賃立用にて元利相済候上は御同人様御在宿之処ハ御弛免被下相辱可被成候乍併此節証文相改御渡申候上来辰年より貴殿方御支配之処ハ相違無御座候 然共全文二請ケ合相記置き然ル上ハ此先一族ハ勿論他方より決而相障申者無御座候 右二付手元仕組相整 彼是為念請人相立置候て猶又町役人衆奥判申請相渡上は毛頭相違無御座候 為後年永代売渡証文如件」となっている。

売買されるのは本町通りにある表口5間1尺5寸、裏横は表口と同じ、入(奥行き)10間3尺の屋敷(土地面積約55坪)であること、家が1軒と蔵が1軒建っているが、蔵は別代金であることなどが述べられている。抵当に入っている屋敷であるから、現代に置き代えても厄介な買い物である。しかも、担保として差し出している屋敷を高須吉十郎なる人物に貸している、家賃として四両拜借している(家賃を前払いして貰っている)、その部分を完全に支配できるのは(自由に取扱えるのは)、來年(辰年)になりますとあり、相当にややこしい家屋敷のようである。

この売買の請人(保証人)は大神忠太、中年中注1であり、また、奥印は日過町組頭注2孫太郎、

同助役源助となっている。なお、天保3年(1832)辰12月の家屋敷永代売渡証文(石橋家文書12)では、且過町組頭はここでの売り手である九右衛門、助役は孫太郎となっている。つまり、約10年の間に九右衛門は引退し、孫太郎が助役から組頭に昇格したということである。

さて、家屋敷の場所は「本町通り」となっているが、当時の姪浜には本町または本町通りという正式の町名は見当たらない。他方、先号で述べた様に、家屋敷の売買では奥印を捺すのは、家屋敷のある町の組頭のようなものであるから、売買されたのは且過町の旧唐津街道に面した家屋敷であることはほぼ間違いなからう。

どうでもよい人物ではあるが……

家屋敷の売買という本筋からは離れるが、この文書からわかる面白いことのひとつは、高須吉十郎という、苗字を名乗る資格のある人物が、福岡市中ではなく郡部の姪浜で借家住まいをしていることである。平民で苗字を許されるほどの者ならば住む家ぐらひは持っている筈で、借家住まいをすることはなからう。すると、高須なる人物はおそらく武士であろうが、いかなる事情があったのだろうか。「大休み」という出勤停止処分中か? 他藩から来た浪人者か?

そうなら、どうやって生計を立てていたのか? はたまた、福岡市中に限らず、どこか別のところに家族と住みながら、お妾さんでも囲ったか? お妾さんは平民でも囲えるし……。4両(約80万円!)も家賃を前払いするくらいだから結構お金はあるらしい等々。想像をたくましくする事は、お金のかからない楽しみであり、適度の「頭の体操」にはなるが、くだらないテレビ時代劇の見過ぎのせいで想像が品位を欠き、ひいては「能古だより」の評判を落とす事になるといけないので、これ以上の詮索はやめたがよきそう

だ。所詮、大した人物ではないだろうから。

1両イコール6800文

ところで、見落とされがちであるが、この証文には大変重要な情報が含まれている。それは、売買価格に關する記述の第2段である。即ち、六十文銭三百四拾目が三両に相当するというのは、今後「文」と「両」の換算の際に役立つ。この換算率によると、1両が6貫8百目(6800文)になるが、実は、これは他の文書で使われている換算率と全く同じで、天保の頃、少なくとも福岡藩西部では、これが市場レートだったのではなからうか。なお、筆者は1文を現在の30円、1両を20万円として計算する事が多いが、この換算率で大きな矛盾はないことを付け加えておこう。

利子が積もった?

ここで、明らかに変わった、文と両の間の換算率、それらの現代価格への換算基準をもとに、改めて今回の家屋敷の売買価格を見てみよう。そうすると担保に差出している物件を高須なる人物に貸し、しかも家賃を前払いして貰っているなんてことは、「ややこしい」のうちに入らないくらい複雑な状態にたち至っている事が浮かび上がってくる。

まず、家屋敷の売買価格は、60文銭4貫目であるから、約720万円ということになるが、これは前号で紹介した文化9年(1812)、弘化5年(1848)に行われた家屋敷の売買のときの価格のナント8〜10倍に当たるのである。いかに家屋敷の立地条件が違うといっても、姪浜という狭い地域でこれだけの差があることは考えにくい。だとすると、この大きな差の原因はどこにあるのだろうか?

この疑問に対する答の鍵は、冒頭前段の「寛政九巳年(1797)両家屋敷蔵と共に書入証文」にあるらしい。つまり、45年ほど前、借金の担保に入れたにも

かわからず、利子を払ってこなかったもので、その利子が積もりに積もったということのようである。昔は一般的に利子が高かったのであるが、仮に年1割5分単利としても、45年間では利子分だけで、元金の7倍近くになる。勿論、45年間を通じてではなく、たとえば終りの20年間だけが利子が払われなかったということかもしれないが、いずれにしろ利子がかさんだらしいことが想像される。その状態で、家屋敷の所有権を動かそうというのであるから、ここに書かれている60文銭4貫目という価格には、利子分が含まれているに違いない。従って、買った方からすれば、それまで払われなかつた利子分を含めて買取つたということで、この売買では現金はあまり動いていないのではないかとというのが筆者の想像である。

しかし、それだけでは安美屋は担保を取り上げられるだけで、困った状態に落ち入るに違いないし、安美屋側は現金が必要らしいので、ある程度の現金が渡るようにならないうのが、「右之内式貫目ハ五ヶ年払入」であろう。いずれにしろ、この家屋敷の売買は、数10年来の懸案を一挙に解決しようというもので、石橋家側が、損を覚悟で帳簿上の整理をしたものと思われる。

写真2



蔵は別口

さて、以上の売買で別口とされた蔵であるが、そのときの永代売渡し証文も保存されている(石橋家文書20-12、写真2)。それによると、蔵の大きさは表口2間半、奥行き3間半で、代金は正金15両とある。蔵といえば物品を保管するのが目的であるから、保管出来る量、したがって蔵内部の高さも代金をきめる重要な条件と思われるが、何しろ「ほら、あそここの蔵ですよ」ですむ時代であり、この程度の条件記述でよかつたのであろう。代金の正金15両は現在の約300万円に相当するが、当時としてもそれなりの買い物だつたに違いない。

ところで、蔵と云えば、裕福な商家の裏庭にデンと建っていて、蔵に貯蔵されている物は売り買いされても、蔵自体はおよそ売買の対象にはならないような印象があるが、考えてみれば(考えなくても?)、栄枯盛衰世の習いで、蔵が売買されても不思議ではないのである。

井戸・軒下売ります

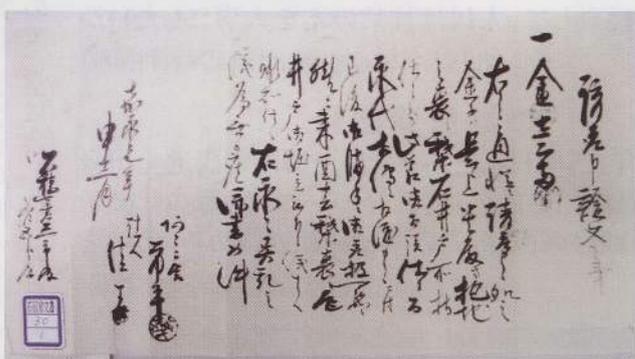
蔵の売買という比較的珍しいケースが出てきたので、ついでに面白い売買を二つ紹介しよう。

その第一は井戸の売買である。石橋家文書30-1は、嘉永元年(1848)申12月、阿三屋市平が、石橋善三郎(房種)、善五郎(後の石橋善左衛門房重)親子に石井戸(杵が石で出来た井戸)を一両(約20万円)で売ったときの請取り証文である(写真3)。請人は目明しの清吉がつとめている。奥判はない。

「石橋善三郎様所有地の裏に石井戸を持つているが、それを売渡し、代わりに次の酉年春までに自分(市平)所有地の裏に瓦井戸(瓦屋根つき井戸か?)を掘ってもらえるものと理解しています」という主旨の文書である。20万円出して石井戸を買い、さらに瓦井戸を

提供するのであるから、石橋親子に取っては、井戸を二つ買ったのと同じであるが、その程度の余裕はあったのだろう。

写真3



あと一つは、売主・買主・請人すべて同じ組合せで、「永代売渡し証文之事」(石橋家文書31)で

「二、横町貴殿方支配家隣二相添居申候屋下通り建込分

一、当春拙者表二瓦井戸堀立約定之事」となっている。この証文は嘉永2年(1849)西正月付けで、代金は1両2歩(分)(約30万円)となっている。

第1項目にある

「屋下」というのは軒下のことで、建物の軒が善三郎・善五郎親子側に出ているが、軒下の通り道になっている分を買い取ったということである。筆者の幼少ころは、ある区画の内側にある他家の私有地を通って反対側の通りに出ていくことができたものである(運が悪いと、「人のうちバ通っちゃイカン!」とどなられ、逃げる事もあった)。いずれにしろ、ここに出てくる軒下の通りも、おそらく私有地ながら、近隣の者が自由に通り抜けしていたのではなからうか? 軒下を通る側からすれば、そこは誰の所有であつても構わないのであるが、この場合は石橋家の所有にするのが自然であり、実際にそうしたということである。

第2項目は上の文書(石橋家文書30-1)につながる話を確認したということである。

以上の3件は相互に関係があり、売買は天保14年(1843)から嘉永2年(1849)まで足掛け7年におよんでいる。その間に売り手側では九右衛門から市平へ代替わりがあつたらしい。ところで、市平が差出した証文では、屋号が阿三屋となつてはいるが、これは文書20-1に出てくる安美屋と同じである事は云うまでもない。この屋号については、安美屋、阿三屋だけではなく網屋と書いたものもあり、おそらく網屋が本当で、あとは当て字と思われる。江戸時代の文書には良くある例で、名前に關しては昔の人は現代人よりははるかにおおらかであつたらしい。あるいは、当て字を使う様な「遊び心」があつたというべきか? なお、網屋は姪浜浦(現福岡市西区姪浜3丁目の北寄りの地域)にあつて、姓は西島(西嶋)、代々網元として知られた家である。

注1、「中年」という役があつたらしいが、よくはわからない。ご存知の方に教えを乞いたい。

注2、組頭は、名主、百姓代とともに地方三役(じかたさんやく)といわれる役職のひとつで、名主(庄屋、肝煎)を補佐するのが役目であつたときがあるばかりでなく、同一地域内でも村ごとに職務内容が異なつていたようである。石橋家文書では、且過町組頭や下野間町組頭などの肩書きが使われていて、その選出単位が姪浜村ではなく、村内の町が単位となつてはいることがわかる。ただし、これも村の大きさや村内の人口分布にもよるだろうから、一概には言えない。

|| いしはし よしひろ・福岡県立修猷館、東大院卒
・名古屋大学名誉教授・理学博士 ||

「甘棠館」と「修猷館」

2枚の扁額(複写)、一堂に展示

亀井南冥と二門の業績を称える第1展示室のリニューアル作業で、最後の大仕事になったのは、2枚の扁額のコピー制作だった。東学問所「修猷館」の扁額は同高校(福岡市早良区西新)の正面玄関に飾られ、西学問所「甘棠館」の扁額は九州大学(福岡市東区箱崎)が長年保有している。まづ九大から電子データを借用して実物大のコピーを業者に委託した。

一方、「修猷館」の作業は7月23日(月)、同高校の総括教頭菊池有先生立ち会いのもと、玄関の壁面か



《甘棠館扁額》

公卿の伏原宣条(1720~1791)の筆。甘棠館の館名は、五経の一つ『詩経』の「召南」の章「蔽芾甘棠、勿剪勿伐(周の召公の善政に感動して、人民は甘棠の木を大事にした)」からとったもの。
(九州大学付属図書館付設記録資料館蔵)

《修猷館扁額》

天明6(1786)年、当時日本を訪れていた清国の賜進士出身の趙佑の筆。修猷館の館名は、五経の一つ『尚書』の「微子之命」の章句「踐修厥猷(祖先の聖徳を践み修める)」からとったもの。
(福岡県立修猷館高等学校蔵)



ら扁額を下し、会議室で撮影する大がかりな作業になった。左の写真2枚。

天明4(1784)年に同時開校した両学問所の明暗は、つとに有名だが、亀井南冥が初代館長を務めた甘棠館はわずか14年で閉校の憂き目にあった。しかし修猷館は明治維新のピンチを乗り越え、現在は男女共学の福岡県立高校として、その歴史的な存在感に際立っている。

室内での撮影は約1時間に及び、扁額表面を覆うフィルムの反射光線を抑えながら、さまざまな角度から撮影、なんとか満足できるものに仕上がった。

かくしてライバル関係にあった東西学問所の扁額は、228年間の時空を越え、コピーながら初めて一堂に会した。写真上。

ロシナンテス「新たなステージへ」

・国内活動強化 スーダンと東日本つなぐ

2011年1月、認定NPO法人の認定を受けた「ロシナンテス」(北九州市小倉北区・川原尚行理事長)の2011年度の活動ぶりを伝える年次報告書が届いた。一番の特徴は東日本大震災の救援・復興協力事業に取り組み、従来のアフリカ・スーダンにおける活動に加え、国内活動を強化したこと。報告書の表紙を「閑上(ゆりあげ)・スーダン大運動会」(7月3日・宮城県名取市閑上)で飾り、スーダンから招いた子どもと被災地の子どもが手をつないで「かけっこ」する姿を大きく伝え、両国間の交流事業をアピールした。

報告書に掲載された2011年4月1日から翌年3月31日までの年度収支報告書によると、当期の収入は1億3千八百萬円。このうちの約60%を寄付金収入(8千2百万円)が占めた。これに対し支出は9千9百万円。内訳は海外活動費4千7百万円に対し国内活動費5千百万円。国内が海外を上回った。収入との収支差額4千1百万円に、前期からの繰越収支差額1億余円などを加え、計1億4千2百万円を2012年度に繰り越した。

これについてロシナンテスは「認定NPO法人は寄付収入に対する事業費比率が70%以上という審査基準があり、今回の認定は複数年におけるもので、2011年度は多くの寄付金を頂いたが、事業費をあえて70%以下に抑えた」と説明している。



ロシナンテス
年次報告書 2011

カメラスケッチ 世界のフェリー (国内篇)

☆玄界灘☆ 〔神湊〜大島航路〕

宗像市の大島は周囲約15キロ、人口約800人の島。写真①の遠景で、「漁業が島の基幹産業です」と案内のパンフ。わが能古島は周囲12キロだから大差ない。標高では大島が御嶽山(224メートル)、能古島は展望台(195メートル)が最高地点とされる。



① JR東郷駅で電車を降り、西鉄バス「神湊(こののみなど)波止場行き」に乗る。宗像大社に立ち寄り約25分で波止場に着いた。

片道25分、料金550円

宗像市営大島航路は1日7〜8便。フェリー「おしま」(片道550円)

写真②に乗って約25分。大島港の渡船ターミナルはまだ新しかった。写真は接岸時の人手の少なさ。女性を含めた3人ほどで、もやいを取り、ブリッジを移動し、乗船券を受け取っていた。



②



③ 島内巡りは民宿のマイクロバスを利用した。宗像大社は、大島に中津宮、女人禁制で知られる沖ノ島に沖津宮を置く。

中津宮で思いがけない資料に出会った。日本海海戦の戦闘状況をつぶさに記した「沖津宮日誌抄録」だ。

股々たる砲声は刻一刻に激を加え：

五月二十七日、西風強曇天霧霞 本日、午前七時四十分頃、敵艦隊東水道と通過せしもの如し、(中略) 正午より、本島の西北に当り、砲声盛んに聞こゆ。(中略) 股々たる砲声は刻一刻に激を加え、天柱ために裂け、地維まさに挫けんとするが如し。砲煙漢々、海上とおおい、閃光爛々、海若為に夢を驚かし、加えて強風怒涛、烈々として海上に吠ゆ。(中略) 午後三時、わが艦隊は敵を圧し、敵艦は方向を転じて逸出せんとし、われまたこれをさえぎらんとす。(後略)

日誌は沖ノ島にいた主典、宗像繁丸の筆。「望楼」としきりに連絡をとり、電話で情報を交換する様子が読み取れる。二十九日には「我軍大勝利の報を伝う。一同万歳を三唱す。」と。



④

大島には戦前に築いた「砲台跡」写真④がある。バスを運転する若者は「ばあちゃんたちが小学生の頃、建設用の小石をかつぎあげたそうです」と話した。

対馬海峡は歴史の宝庫

地図を開くと、ロシア艦隊が通過しようとした対馬海峡は東シナ海と日本海を分ける狭い水道で、朝鮮半島と日本を結ぶ海上交通の要路。古代から盛んに利用された「歴史の宝庫」なのである。地元も「沖ノ島を世界遺産に」と運動中だ。

能古博物館は、開館20周年を機に、展示の主要な柱に「博多湾物語」を据えたが、これをさらに充実、拡充するヒントが、対馬海峡にはあるように思えた。

(編集部)



◇グループ来館の皆さん◇

▽8月9日(木)夏休み親と子の自然観察のつどい(福岡市立少年文化会館主催) 写真① 子供も27人、大人

25人の計52人。「日野原ホール」で岩石・鉱物標本を観察した後、標本作製方法を学び、昼食をとった。



①

▽8月26日(日)「ふれあいサロン」例会 写真②

能古島内の高齢者グループ。藤瀬さんら21人。『海の部屋』

に集まった。「ふれあいサロンの歌」(リンゴの歌のメロディで)の合唱で始まり、館の展示「海外引揚げの記憶」について館側の話を聞いた。出席者から「朝鮮半島へ引き揚げる途中の朝鮮人を乗せた船が島の東側で座礁、多くの朝鮮人が島に上陸した。しばらく海岸で暮らしていた。」との新しい情報もたらされた。

▽9月1日(土)引き揚げ港・博多を考える集い 写真③ 展示資料の写真や出版物を提供した



③



②



④



⑤

森下和子さん(左)と山本千恵子さん(右)。2人は朝鮮半島から引き揚げた。この日初めて館を訪れ、「スペースが広いのに驚いた。市の展示コーナー(ふくふくプラザ)に優るとも劣らぬ内容」と森下さん。「引き揚げ後の暮らし、国の対応にも視点を向けた」という館側の説明にうなずいていた。

▽9月5日(土)博多を学び歩く会 写真④ リーダーの入江さんから10人。リニューアルしたばかりの第1展示室で『亀井南冥と金印』、『長男昭陽ら一門の業績』、『門下生広瀬淡窓』、『甘棠館と修猷館』、『唐人町の今昔』などを鑑賞、リニューアルを担当した20代の学芸員の解説を聞いた。

▽9月21日(土)新老人の会鹿児島支部 写真⑤ 有川優子事務局長ら7人。「2日間の旅だが、一番の目的は能古博物館の見学です。」とうれしいご挨拶。その場で4人が「友の会」に入会(後に1人追加)。会員特典の入場料無料(同伴者1人を含む)を早速活用した。一行は「海の部屋」や喫茶コーナーから見る対岸の景観に心を奪われた様子。アイランドパークや展望台(標高195m)にも足を運び、島の秋色を満喫した。

『海の部屋』へどうぞ

本製テーブルの中央を飾るのは大型ジオラマ「博多湾」。広々とした窓の彼方には対岸の福岡タワーやドーム球場、ホテル、マンション群が...

創立20周年記念事業のテーマ「博多湾物語」の中心をなす『海の部屋』に、別館の1、2階に常設展示していた「ヨットの牛島龍介青年」、『海外引き揚げの記憶』のコーナーを新たに設けた。別館のスペース全てを『多々羅義雄作品展』に明け渡した期間限定の処置。『海の部屋』にふさわしい雰囲気さらに高まった。

▽この機会にぜひ「海の部屋」をご利用下さい。10数人程度の集まりに好都合です。休館日の利用(要ご相談)も可能です。

クイズをひとつ。テーブルの周りの10脚の椅子に制作者の「遊び心」が隠されていますが、それは何でしょう? ※正解は次号で。

能古博物館協賛会・友の会

継続・新規会員 (平成24年9月現在)

▼法人協賛会員

- ・医療法人 笠松会有吉病院
- ・税理士法人エム・エイ・シー
- ・医療法人社団江頭会さくら病院
- ・医療法人社団廣徳会岡部病院
- ・多々良福祉会 特別養護老人ホームなごみの里
- ・多々良福祉会 たいようの里
- ・(株)CDS
- ・医療法人恵光会 原病院
- ・(株)サンコー
- ・原学園 原看護専門学校
- ・浄満寺
- ・(株)メディカルアシスト青葉
- ・(医)博仁会 福岡リハビリテーション病院
- ・(株)彩苑
- ・(株)豊友技建工業
- ・E-ムサービス(株) HSS九州事業部
- ・(有)トータル・サポート・コーポレーション
- ・(株)ホームケアサービス
- ・西日本シティ銀行土井支店

(敬称略・順不同)

▼個人協賛会員

- 明石 散人
- 足立 晴道
- 安藤 文英
- 石野 智恵子
- 出口 親
- 上崎 典雄
- 上野 道雄
- 岡部 きよみ
- 柏木 重人
- 亀井 准輔
- 河邊 鐵夫
- 久保 千春
- 熊谷 豪三
- 毛戸 彰
- 朔望
- 朔元 則

▼友の会会員

- 島塚 祐弘
- 仁保 喜之
- 鈴木 友和
- 添島 律子
- 平祐一
- 多々羅 節子
- 寺坂 禮治
- 寺田 隆
- 戸井 雅貴
- 原敬二郎
- 原寛
- 原真澄
- 原礼子
- 藤井 鉄夫
- 舟越 茂義
- 増田 康治
- 翠川 文字

- 一鬼 秀之助
- 市丸 喜一郎
- 出光 芳秀
- 井上 昭義
- 稲葉 英彦
- 今永 一成
- 今村 さち
- 石清水 由紀子
- 岩本 博秀
- 上田 恒久
- 上田 博
- 上田 玲子
- 上原 孝正
- 上原 八郎
- 牛島 弘子
- 内山 茂美
- 内山 節子
- 宇都宮 邦子
- 海 眞記子
- 浦田 眞子
- 江口 裕
- 江口 正一
- 江崎 小二郎
- 大石 恭仁子
- 大野 彩子
- 大野 茂子
- 大智 照子
- 大島 玲子
- 大庭 浩司
- 大庭 静枝
- 岡部 九州生
- 岡部 誠
- 小川 道博
- 小川 美枝子
- 小野 崎徹
- 小野 裕美
- 白橋 裕美
- 進藤 康子
- 杉原 正毅
- 杉山 謙
- 杉山 祐子
- 関本 直之
- 関本 賢司
- 関本 敏巳
- 河村 敬一
- 木血 敦代
- 北原 君子
- 岸和 枝
- 岸洋子
- 岸川 伸子
- 吉瀬 宗雄
- 城戸 兼子
- 木戸 龍一
- 木山 啓子
- 清田 美弥子
- 久世 玲子
- 久武 英子
- 國武 正隆
- 久芳 明子
- 黒田 達也
- 甲本 セツ
- 小坂 七子
- 児玉 玲子
- 小堀 瑠伊子
- 小宮 作
- 小柳 定子
- 小山 儀一郎
- 小山 富夫
- 小山 美
- 神和 美
- 坂口 征雄
- 坂梨 喬
- 坂木 榮紀
- 佐々木 ミノエ
- 佐藤 郁男
- 塩田 康文
- 執行 敏彦
- 篠田 栄太郎
- 篠原 ヨシ子
- 柴本 次雄
- 柴本 隼太
- 柴本 隼太
- 地頭所 ミエ子
- 白橋 裕美
- 進藤 康子
- 杉原 正毅
- 杉山 謙
- 杉山 祐子
- 関本 直之
- 関本 賢司
- 関本 敏巳
- 瀬戸 美都子
- 芹野 二美
- 高木 いづみ
- 高嶋 俊光
- 高嶋 季雄
- 高島 英介
- 高根 襄
- 高松 まり
- 武田 洋子
- 田坂 大蔵
- 田里 朝男
- 田代 朝子
- 立石 京
- 谷口 治達
- 武末 照男
- 多々羅 吉臣
- 田中 奈央
- 田中 丸善彦
- 辻野 一男
- 徳永 武生 和子
- 富永 靖雄
- 豊田 文彦
- 豊田 富美子
- 長尾 勲
- 永岡 喜代太
- 中島 謙吾
- 中島 伶子
- 中野 晶子
- 鍋島 喜美子
- 成富 典子
- 成富 耕志
- 成富 陸夫
- 西方 俊司
- 西田 靖子
- 西田 奈々
- 西川 晴己
- 西山 紀子
- 野崎 逸郎
- 野村 武
- 長谷川 寿美子
- 波多野 直之
- 服部 たか子
- 福山 智美
- 八田 朋美
- 花田 ひろ子
- 瀧崎 須美子
- 林十九楼
- 林由 紀子
- 林昌 也
- 原和 美
- 原順 子
- 原靖 子
- 原祐 一
- 原口 和子
- 原坂 泰盛
- 原田 雄平
- 日野 原重明
- 森 純子
- 森 恍次郎
- 森 正敏
- 森下 昭子
- 森本 繁
- 安恒 忠男
- 安保 博史
- 安松 淳祐
- 安野 鈴子
- 矢野 美也子
- 山川 美也子
- 山崎 博子
- 山口 勝久
- 山田 博子
- 山本 留美
- 山本 千恵子
- 山本 千恵子
- 結城 史朗
- 吉開 威
- 吉倉 禎子
- 吉田 登美代
- 吉田 泰久
- 吉田 洋一
- 吉安 蓉子
- 米倉 満子
- 脇山 玉枝
- 脇山 宏子
- 和田 宏子
- 三戸 京子
- 三苦 進
- 南アサノ
- 三野 原勝子
- 箕原 聡
- 三宅 碧子
- 宮崎 美津子
- 村岡 建次
- 村上 牧
- 村あ とむ
- 森 恍次郎
- 森 純子
- 森 正敏
- 森下 昭子
- 森本 繁
- 安恒 忠男
- 安保 博史
- 安松 淳祐
- 安野 鈴子
- 矢野 美也子
- 山川 美也子
- 山崎 博子
- 山口 勝久
- 山田 博子
- 山本 留美
- 山本 千恵子
- 山本 千恵子
- 結城 史朗
- 吉開 威
- 吉倉 禎子
- 吉田 登美代
- 吉田 泰久
- 吉田 洋一
- 吉安 蓉子
- 米倉 満子
- 脇山 玉枝
- 脇山 宏子
- 和田 宏子

- 17 3 3 12 4 6 2 3 3 5 1 1 3 18 2 1 1 2 7 3 5 3 3 9 3 4 3 7 10 1 5 2 7 1 6 6 2
- 2 1 3 7 1 2 16 3 4 3 2 4 4 3 4 3 2 3 4 2 2 5 7 1 3 3 10 3 2 1 2 2 6 2 19 3 3 6 3 8 4 2 3 3 4 18 1
- 3 5 9 9 2 4 15 1 2 1 1 4 3 10 4 7 1 3 1 1 2 3 2 15 3 1 1 6 4 5 3 2 2 5 13 3 1 4 4 3 3 2 2 20 1 1 9 8
- 20 1 4 1 4 6 3 2 1 17 5 3 5 3 8 1 1 1 14 4 3 18 2 3 3 3 3 1 1 1 1 7 5 12 3 1 1 8 1 1 3 4 3 4
- 1 1 1 2 3 5 3 2 1 5 1 8 4 15 4 1 3 2 2 1 2 13 1 1 2 4 12 4 4 2 3 6 6 3 1 3 3 10 2 3 3 5 4 3 1 5
- 17 3 3 12 4 6 2 3 3 5 1 1 3 18 2 1 1 2 7 3 5 3 3 9 3 4 3 7 10 1 5 2 7 1 6 6 2

注1 敬称略(五十音順)
数字は会員歴(年数)

- (1) 振込み料は当館にて負担させていただきます。
- (2) 受付け次第、会員証とコーヒーチケットをお送り致します。
- (3) 会費有効期限は1年と致します。
- (4) 入館時に会員証(ご同伴1名まで有効)を受付けに提示下さい。ご入館は随意で回数制限はなく無料です。
- (5) コーヒーチケットで挽きたての香りを豊かなコーヒートをサービスクレジットをさせていただきます。
- (6) 能古博物館だよりを年数回お送り致します。また、会員の皆様の御寄稿、ご意見は同誌に掲載致します。但し諸事情で掲載を見送る場合がございます。
- (7) 館が企画する催物のご案内と参加費の割引を致します。



アクセス

西鉄バス

- ・JR博多駅 博多口正面Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行: 約50分
- ・天神 三越前1Aのりば
300、301、302番 能古渡船場行: 約30分

市営地下鉄:「姪浜駅」下車 乗り継ぎ

- ・西鉄バス姪浜駅 北口
98番 能古渡船場行: 約12分
- ・タクシー: 約 8分

市営渡船(フェリー)

- ・姪浜-能古島間: 約10分
- 能古島渡船場より博物館まで
- ・徒歩: 約5分~10分
- ・アイランドパーク行き西鉄バス停
「能古学校前」下車、徒歩(下り坂)約3分

問合せ

姪浜旅客待合所 TEL 092-881-8709
能古旅客待合所 TEL 092-881-0900

開館日/毎週 金曜・土曜・日曜と祝日

(注) 冬季(12月~1月)は、年末年始及び展示物入れ替えなどで長期休館を原則としています。御用の場合は事前にお問い合わせ願います。

開館時間/10:00~17:00(入館16:30まで)

※団体の場合は休館日にかかわらずご予約ください
団体20名以上2割引

入館料/大人400円・高校生以下無料

	姪の浜 発	能古 発
5	15	00
6	30	15 45
7	00 30	15 45
8	00 30	15
9	15	00
10	15	00
11	15	00
12	15	00
13	15	00
14	15	00
15	15	00
16	15	00
17	15 45	00 30
18	15 45	00 30
19	45	30
20	30	15 45
21	00	45
22	00	45
23	00	45

◎印は日祝日運休 2012年8月現在

渡船場からアイランドパークへの西鉄バス時刻表(平成24年8月1日現在)

渡船場前発(能古学校前まで約2分)

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平日	12 55	45	30	30	55	35	35	35	45		
土曜日	12 55	45	30	30	55	35	35	35	45		
日・祝日	12 55	45	30	30	55	35	35	35	45		00

アイランドパーク発(能古学校前まで約8分)

時	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
平日	30	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
土曜日	30	20	3	13	28	18	18	18	18	28	
日・祝日	30	20	3	13	28	18	18	18	18	28	38

※ 繁忙期はバス、渡船とも臨時便が運行されます。



財団法人 亀陽文庫

能古博物館

〒819-0012 福岡市西区能古522-2 TEL 092-883-2887 FAX 092-883-2881
http://nokonoshima-museum.or.jp E-mail info@nokonoshima-museum.or.jp